

石井睦美氏 講演会 概要

「本を読む・物語を生きる」をテーマに、自身の読書と創作の来歴、言葉と物語の価値、他者理解と想像力の重要性を中心に語っていただいた。

【近況・進捗】

読書体験の原点

幼少期、父と室内で絵や読書中心の生活を送り、物語へ深く没入する感覚を早期に獲得。

高校入学前の高校からの課題図書を契機に詩人・立原道造に傾倒。現国の野地安伯教諭による短詩の導入授業で言葉の感受性が涵養。

大学で中村真一郎氏と出会い、資料探索・編集実務（雑誌ユリイカ）へ接続。作家・詩人たちとの交流が創作動機を強化。

【創作と作品】

自伝的記憶を核にした短編「パパはステキな男のおばさん」など、日常の微細感情を丹念に描く作風を位置づけ。

谷川俊太郎、田辺聖子らの言葉を参照し、「全腕力」で書く姿勢＝人生経験の総体が作品に沈殿するという創作観を再確認。

【実務的示唆（図書館・教育現場）】

高校段階で文学教材が減少する現況を懸念。説明文と並行し物語読解で想像力・共感力を育む必要性を強調。

読書は訓練であり、段階的な習熟（音楽練習の比喩）を要する。速読・要約視聴は「筋」理解に留まり、物語体験にいたらない。

紙の本の「手触り・記憶の容器」としての価値を再評価。電子の利便と併存しつつ、実体験を媒介に読書文化を継承。

〈キーワード整理〉

言葉と物語の効用

想像力の二層

再現的想像（テキストから具体像を立ち上げる）

生成的想像（共感の先に新たな世界像を構築）

他者理解と民主主義

木村草太氏の問題提起を引用

- ・数学リテラシー偏重に対し、文学軽視は他者理解の希薄化を招く

【事例提示（読書がもたらす変容）】

絵本『むこうがわのあのこ』

分断の柵を越える子どもの柔軟性のある相互理解の萌芽。

詩集『空が青いから白をえらんだのです 奈良少年刑務所詩集』

言葉の学びが内省と謝罪の表出（「ごめんなさい、母さん」）を可能にする過程。

【人間と AI の差異】

生成物の「～風」と作家の全人生が刻印された作品との差。人間の心・魂に根ざす表現が感動の核である。

【読書文化継承の実務課題】

子どもの非読傾向への現場の危機感。ゲーム・動画の魅力を前提に、物語読解のハードルを段階設計と推薦や手渡しで下げる。

国語授業、学校図書室、公共図書館、私蔵本棚への連携導線を太くし、反復読書と所有感で定着を図る。